長野県から群馬県にかけての地域の縄紋中期中葉土器の編年研究

Perspective of Chronological Study at the Middle Jomon pottery in Regions from Nagano Prefecture through Gunma Prefecture

小林謙一

はじめに
❶近年における土器型式研究状況
❷時期と系統の設定
おわりに

[論文要旨]

本章では，近年の研究成果を中心とした土器研究の研究史的まとめを行い，本研究に関わる研究者相互の編年研究の対比を行い，群馬県域・東信地域両者に共通し得る範囲での土器群の時期設定と系統区分とを設定した。

時期設定では，群馬県域と東信地域に共通する時期設定として，勝坂１ｂ式（新道式）から加曽利Ｅ１式期を，１～３期に区分し，東信地域の川原田遺跡出土土器については，勝坂式土器の編年を基準に，各時期を細分した。

系統設定では，当該地域に関わる研究者の最大公約数的な系統区分を提示した。

はじめに

本研究は，群馬県西部の赤城山南麓・西南麓から長野県東信（佐久）地方の浅間山南麓にかけての地域の，縄紋時代中期中葉頃の土器群を材料に，土器の胎土分析と型式学的検討両者の立場から，縄紋土器の生産と流通の実態を探り，社会的なネットワークを復元することを目的としている。社会的ネットワークは，人・土器・情報の移動という形で把握される。その際，縄紋集落における在地生産の土器と，よその地域・遺跡から持ち込まれたという意味での搬入土器との弁別が問題となる。任意の土器資料について，遺跡周辺または周辺地域という意味での在地生産された土器か，他の地域から搬入された土器かどうかの区分の方法を課題とし，土器胎土分析という自然科学的な手法を持ったアプローチと，型式学的検討という考古学的なアプローチの，両面からの検討を進めるため，まず方法論的な整備を行う必要がある。

本章では，本研究のためのガイドラインとして，近年の研究成果を中心とした土器研究の研究史的まとめを行い，分析対象の土器群を整理する。その中で，本研究に関わる研究者の立場を明らかにし，相互の編年研究の対比を行い，検討していく上での手がかりとしたい。同時に，便宜的ながらも，群馬県域・東信地域両者に共通し得る範囲での時期設定を，1～3期というラフな形ながらも設定しておきたい。ただし，あくまでガイドラインとしての時期設定であって，本論以下における各研究者の見解を縛るものではなく，実際に地域の特徴を加味した上での各研究者による編年・土器群の区分が行われる。本論での設定は，互いの時期・系統設定を通訳していく上での，使い捨てのツールと捉えていただきたい。また，土器集成図は，今回検討対象とした土器資料の提示を兼ねる性格を持つが，胎土分析で扱われた資料のうち，破片資料については図示していない。これらについては，第1部　建石・水沢論文「胎土分析の試料と分析方法」（P 185～194）のなかで提示される。

❶……近年における土器型式研究状況

今回，主に扱った長野県川原田遺跡及び群馬県西部の沼南遺跡，鼻毛石中山遺跡，六反田遺跡など，千曲川・利根川上流域の中期中葉から後葉はじめにかけての遺跡についての研究状況を，東関東，南関東，中部地方からの視点を織り交ぜながら概観しておきたい。本研究の目的は，型式学的な検討に，胎土分析による産地推定を絡めて，土器群の動きを探ることを試みることであるが，そのために関東・中部地方の広域の，多岐にわたる系統土器群が複雑に関連しあった状況を扱うこととなる。共同研究という性格上，複数の地域の研究者が共同で検討し得る共通の土俵を用意しておく必要がある。ここでは，地域ごとの研究動向を概観した上で，次節でおおまかに共通の時期設定を行っておきたい。なお，本論では，基本的に引用・参照する研究者の用語・呼称を使用する。したがって，「焼町土器」「焼町類型」など，不統一な表記となる上，本論以外と異なる呼称となる場合があるので注意されたい。

1－1　群馬県の土器群の研究

赤城南麓の宮城村鼻毛石中山遺跡（小林・建石・閏間 1996）では，下記の時期区分を行った。

1 a期　勝坂1式（新道（古）式），阿玉台Ⅰb式

1 b期　勝坂1式（新道（新）式），阿玉台Ⅱ（古）式，大木7 b式

2 a期　勝坂2式（藤内Ⅰ式），阿玉台Ⅱ（新）式，大木7 b式

2 b期　勝坂2式（藤内Ⅱ式），阿玉台Ⅲ（古）式，大木7 b式，焼町土器

3期　　勝坂3式（井戸尻Ⅰ式），阿玉台Ⅲ（新）・Ⅳ式，大木8 a式

山口逸弘は，1999年の沼南遺跡の報告において，群馬県内の中期中葉～中葉末の土器をまとめている。沼南遺跡出土土器の時期区分としては，おおまかに2段階に区分している。

第1段階（阿玉台Ⅱ～Ⅲ式，勝坂2式段階）　群馬県内においては，阿玉台Ⅱ式には勝坂1式や「新巻類型」が共伴するが，沼南遺跡では明瞭な出土例がない。大木7 b式，越後・北陸地方の土器，七郎内C類型（塚本のいう七郎内Ⅱ群）がみられる，とする。

第2段階（焼町類型～加曽利E Ⅰ式古段階）　沼南遺跡では，標準的な阿玉台Ⅳ式はみられず，勝坂3式終末段階の特徴的な甕状深鉢は皆無である。「三原田式」・「三原田タイプ」といわれる一群の土器を伴う。なお，山口は，第2段階における勝坂3式土器の欠落に着目し，「沼南型組成」と命名している。この点については，小林は，研究者の分類次第，例えば沼南129住1の土器を勝坂式とするか勝坂系とするのかによって，「＊＊組成」の定義付けが変化しないか，また，数量的な検討がなされないのは「組成」の把握にいたらないのではないか，という疑念を提示した（小林 2001）。集落毎の土器組成をみていくことには賛成であるが，ある・なしだけで判断するのでは，優れた視点を生かせないのではないかと危惧する。

第2段階については，群馬県内の資料においても，細別しえる材料は多い。たとえば，渋川市行幸田山遺跡（大塚 1987）での大塚昌彦による行幸田山遺跡出土土器の時期区分では，勝坂Ⅲ式期の遺構一括出土例はないものの，加曽利E 1式期については，甕状深鉢である山口の「勝坂系土器」と，外反する無文の口縁上端部とクランク状などの口縁部文様を持つ深鉢（広義の三原田タイプ）が共伴する9住と，胴部文様帯が圧縮された甕状深鉢とカッパ状の突起を配し沈線でつなぐ三原田タイプとが共伴する1住とに2分される可能性を示している（大塚 1987）。

また，山口は，異系統土器群が複雑に組み合わさっていく型式構造への注意を払いつつ，地勢的に各地域からの土器群の影響を多様な形で受ける群馬県域における，加曽利E Ⅰ式直前段階～古段階に伴う勝坂系土器の末裔の土器群と「三原田型深鉢」との関連を論じている（山口 2000）。「甕状深鉢」「樽状深鉢」で，胴部上半に勝坂3式土器の特徴的要素である「人体状意匠」「渦巻状意匠」を配するものや，体部文様多段構成の土器を，新潟県原遺跡 004T-P 4出土土器や群馬県布施上原遺跡10号住出土土器に着目した。これらの土器を，「既に勝坂式としては文様構成が崩れた例であり，勝坂式としての判断が出来ない土器」で「勝坂系」として評価し，いわゆる「樽状深鉢」との関連性を論じた上で，加曽利E 1式期に伴う勝坂式土器の最末期の土器であることを，改めて確認し得たことは重要である。しかしながら，「加曽利E Ⅰ式直前段階」が「中峠式期」という独立した時期を認めてその時期ということなのかどうかといった時期的な問題点と，山口の言う「勝坂系」

土器が，系統的な区分なのか，リダクションされたサブタイプに特殊化して用いた名称なのか不明な点が，問題として残る。加曽利Ｅ１式期に残ることが明確な，「樽状深鉢」の勝坂系土器は，「勝坂４式」なり，「続勝坂式」なりと，改めて型式設定することも考慮する必要はあるかも知れない。型式としてのまとまりを用いないのであれば，「布施上原類型」なり「布施上原タイプ」なり，亜型式としてまとめた方がよいようにも思う。例えば，布施上原遺跡例の勝坂の要素を残す土器を勝坂系と含めるのは，際限ない型式の拡大を招かないか。折衷やリダクションの激しい地域的な土器は，粗製土器などと同じく，無理に特定型式に属させる必要はない場合もあろう。型式内容の歯止めのない拡大は，1976年の「中峠式」（現在は下総考古学研究会により整理されつつある（下総考古学研究会2000など））のように，型式構造理解や編年体系構築の妨げとなる。また，土器や遺跡の性格検討において，「＊＊式」「＊＊系」という名前の一人歩きを危惧する。

長谷川福次は，2001年に刊行した道訓前遺跡の報告において，群馬県内の焼町土器の集成とⅣ段階にわたる変遷を整理している（長谷川2001）。長谷川は，「新巻類型」を焼町土器の発生段階と位置づけない立場を示し，後述する寺内隆夫とは違った見解を示している。

１－２　南関東の中期中葉の時期設定

本稿では，武蔵野台地の中期土器を中心とした，黒尾・小林・中山による，新地平編年を採用する（黒尾・小林・中山1995）[1]。中期中葉（勝坂２式）から後葉はじめ（加曽利Ｅ２式）までについては，５期14細分されている。なお，９期までは中山真治，以降は黒尾和久の担当である。

７期　藤内Ⅰ式期

７ａ期　隆帯区画＋幅広角押文＋三角押文崩れの波状沈線施文。

７ｂ期　隆帯区画＋幅広角押文＋波状沈線文。

８期　　藤内Ⅱ式期

８ａ期　無調整隆帯区画＋幅広角押文＋波状沈線文（武蔵野台地）と隆帯脇を沈線でなぞった区画文＋縦位沈線文（中部～多摩西部中心）が並存する。

８ｂ期　縦位沈線の他に細かい爪形文が発達し，三叉文と組合わさる。頸部横帯楕円区画文の盛行。胴下半の縄紋施文顕著。縦位区画文系パネル文崩れ（武蔵野タイプ）となる。

９期　井戸尻Ⅰ～Ⅲ式期

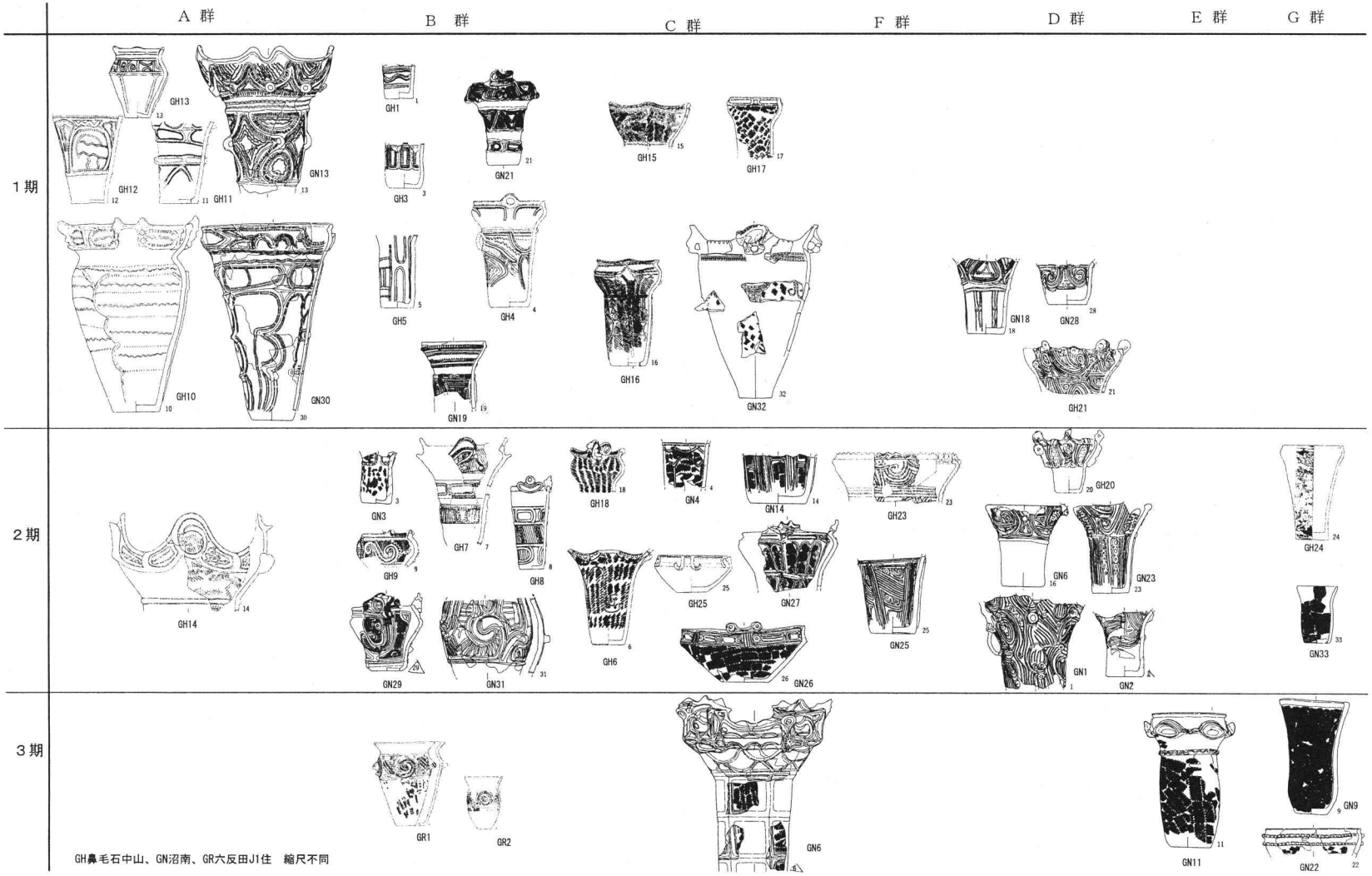
９ａ期　区画隆帯沿いの沈線が太く，交互刺突文が粗大化。中帯文土器，小型円筒形土器多い。人体文（弧状文）は中部～多摩西部中心。

９ｂ期　隆帯の幅広扁平化，半肉彫状の曲線的モチーフ中心。中帯文系と口縁文様タイプ。口縁部無文直立，屈折底，大型把手，Ｊ字状懸垂文が多い。

９ｃ期　勝坂式最終末期。褶曲文系。地紋に撚糸紋や条線紋多用。撚糸紋地紋の「武蔵野台地型」の加曽利Ｅ式の成立期と関係が深く，勝坂式終末期と加曽利Ｅ１式初現期の弁別の可否が問題となる。

10期　加曽利Ｅ１式期，黒尾1995のＩａ～Ｉｃ期に対応して細分される。

10ａ期　胴部の撚糸地紋が卓越し，勝坂式の文様要素を消失した口縁部に横Ｓ字モチーフを配した「武蔵野台地型」の加曽利Ｅ式が盛行。曽利Ⅰ（古～新）式がみられる。


A 群
B 群
C 群
F 群
D 群
E 群
G 群
1期
2期
3期
GH13
GN13
GH12
GH11
GH10
GN30
GH1
GH3
GN21
GH5
GH4
GN19
GH15
GH17
GH16
GN32
GN18
GN28
GH21
GH14
GN3
GH7
GH9
GH8
GN29
GN31
GH18
GN4
GN14
GH23
GH20
GH24
GH25
GN27
GH6
GN26
GN25
GN6
GN23
GN1
GN2
GN33
GR1
GR2
GN6
GN11
GN9
GN22
GH鼻毛石中山、GN沼南、GR六反田J1住　縮尺不同

第1図　群馬県の土器

10ｂ期　胴部に撚糸地紋と隆起帯による懸垂文。大型把手を持つキャリパー形がみられ，頸部の無文区画が普遍化する。沈線地紋による同心円モチーフの土器が盛行。曽利系は減少するが曽利Ⅰ式（新）平行かと考えられる。

10ｃ期　縄紋地文と隆起帯による懸垂文が多くなる。口縁は平縁化，頸部無文区画は存続。多摩・武蔵野台地では，曽利Ⅱ（古）式平行の加曽利Ｅ式文様類似の縄紋地文・粘土紐貼付の土器が伴う。

11期 加曽利Ｅ２式期。胴部に沈線の懸垂文。黒尾1995の中期後葉２ａ～２ｃ期。

11ａ期　太く深い沈線による口縁部渦巻文土器の成立。単節縄紋が地紋の加曽利Ｅ式系が主体で，頸部無文区画も存続。曽利Ⅱ（古）式並行の土器が伴う。

11ｂ期　連弧文土器出現期。渦巻つなぎ弧状・枠状の口縁部文様区画。縄紋地紋とともに，山梨県域の曽利縄紋系土器・斜行沈線文土器の成立に関連すると思われる，撚糸，条線地紋土器も目立つ。頸部の無文区画は弛緩し，やがて衰退する。

11ｃ期　連弧文土器の盛行期。曽利Ⅲ（古）式，「折衷土器」が盛行する。連弧文により２細別も可能であるが，対応する加曽利Ｅ式の細分が不明瞭で，課題である。

埼玉県域の研究状況（金子直行2001など）

埼玉県埋蔵文化財調査事業団では，1982年の「縄文中期土器群の再編」（谷井1982）で，井戸尻Ⅱ式，多喜窪タイプを中峠式段階とし，井戸尻Ⅲ式を加曽利ＥⅠ式古段階に平行とした。近年，金子直行は，まま上遺跡の住居出土土器を中心に再評価を行っている（金子2001）。金子は，（狭義の算盤玉状底部を持つ）多喜窪タイプを加曽利ＥⅠ式古段階に，梨久保Ｂ式（三上1996）を加曽利ＥⅠ式新段階以降に位置づける。埼玉県事業団編年及び金子の議論は，住居一括出土土器をすべて同時期と捉える誤った前提で立論されていながら，資料間の編年的ズレに際して，土器群の編年的位置付けをケース毎に変えていくことで修正を加えていく手法であり，住居一括資料をフンドと見なす点と，土器の時間的組列において系統的な検討が一貫しないと言う別々の次元において，筆者としては同意しかねる考え方である。例えば，井戸尻Ⅱ式段階を中峠式段階とするが，その事例であったはずの善棚12住等のケースを，まま上５住など新資料の解釈の都合上，加曽利ＥⅠ式段階に移動し，実質的に井戸尻Ⅱ式期＝中峠式という根拠を崩しておきながら，北50住等の中峠式を加曽利ＥⅠ式期の新しい中峠式土器であって，井戸尻Ⅱ式に伴う中峠式と異なると，伴出土器のみを根拠に結語している。筆者とは前提条件が異なっているので，個々に矛盾点を指摘しても議論がすれ違うが，少なくても，住居の出土資料の数量的なあり方からみても，勝坂３式・多喜窪タイプは加曽利Ｅ１式以前に主体があること，中峠式（＜中峠式＞及び北50住型など）が，加曽利Ｅ１式古段階直前の，「新地平編年」９ｃ期に時期的に位置づけられることは，より合理性がある位置づけと主張しておきたい。

１－３　栃木県の研究

北関東地方では，海老原郁夫「浄法寺タイプ」をはじめとした北関東地方の土器研究が重ねられている。

塚本師也は，栃木県浄法寺遺跡の報告書において，中期中葉から後葉の土器群を整理した（塚本

1997)。土器群を細かく系統分類している。以下に概略を記す。

A　阿玉台式土器。

B　七郎内Ⅱ群土器。阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期に存続。

C　口縁に隆帯が2条巡り，これを跨ぐS字状等の単位文を配する。阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期に存続。

D　口縁に隆帯が2条巡り，跨ぐように橋状把手や中空の把手を配する。阿玉台Ⅳ式・加曽利EⅠ式古段階にみられる。

D'　器形が甕形，もしくはくびれの強いキャリパー形。

E　口縁部に中空の把手と隆線，頸・胴部には渦巻文・曲折文・縦方向のモチーフを配す。阿玉台Ⅲ・Ⅳ式期に存続。

F　Eの圧縮された口縁部文様帯が幅広くなったもの。阿玉台Ⅳ式・加曽利EⅠ式古段階と捉えている。

G　口縁に単位文を配し，口縁部下端を区画しない。阿玉台Ⅳ式・加曽利EⅠ式古段階に存在する。

H　括れ部より上を，幅広い口頸部文様帯とするもの。加曽利EⅠ式古段階の指標とする。

I　加曽利EⅠ式と共通する器形で，中空の把手がつく。加曽利EⅠ式中・新段階。

J　加曽利EⅠ式と共通するが，胴部に曲折文・渦巻文を配す。加曽利EⅠ式中・新段階。

K　口頸部に弧状の隆帯を貼付。加曽利EⅠ式古・中段階。

L　いわゆる加曽利E式土器。a－iに細別している。d・eは加曽利EⅠ式古段階の指標。a・b・fは加曽利EⅠ式古・中段階。gは加曽利EⅠ式中段階。c・h・iは加曽利EⅠ式中・新段階。

M　口頸部上端に区画文，胴部文様帯上端に隆線か沈線を巡らし，頸部を素文とする。谷井彪（谷井1987）による「下総台地型」の加曽利EⅠ式に相当する。加曽利EⅠ式古段階には確認できるが，位置づけは不明瞭であるとされる。

N　甕型を呈する。abに細分。aは阿玉台Ⅳ式期と加曽利EⅠ式新段階に確認され，bは加曽利EⅠ式新段階に存在する。

O　口縁部に単位文とそれを横位に連繋する隆帯を配す。阿玉台Ⅳ式期。

P　口縁に蛇行隆線や押捺を加えた隆帯を巡らす土器。阿玉台Ⅳ式期～加曽利EⅠ式中段階。

Q　火炎土器と類似するもの。小薬一夫らのいう「擬馬高」（小薬他1987）に対応する。a－cに細分。阿玉台Ⅳ式前後に確認されている。

R　浄法寺タイプ，複弧文土器と呼ばれる土器。加曽利EⅠ式古～新段階に存続。

時期的には，以下のように整理している（塚本1987，495－501頁）。

阿玉台Ⅲ式期　阿玉台Ⅳ式との区分について問題も残るとしつつ，湯坂遺跡T1－V区土坑出土土器が代表例とする。

阿玉台Ⅳ式期　いわゆる「中峠式」土器が大きな割合を占める東関東に比べて，槻沢遺跡14H-P 2出土土器など栃木県域では良好な資料がみられるとする。

加曽利EⅠ式古段階　東北地方では大木8a式に対比。南西関東では，S字・C字・十字文を配するキャリパー形深鉢（谷井彪による「武蔵野台地型」）が安定的に存在する。栃木県では，御城田遺跡476土坑などでL類d・e・f・H類がみられ，栃木県北部では浄法寺タイプがあるが次段階

以降も存在する。
加曽利ＥⅠ式中段階　大木８ｂ式に対比。埼玉県埋蔵文化財調査事業団の中期編年のⅨｂ期（谷井1982）を基準とする。Ｌ類－ｃ・Ⅰ類，Ｒ類（浄法寺タイプ）などがある。
加曽利ＥⅠ式新段階　大木８ｂ式に対比。埼玉県埋蔵文化財調査事業団の中期編年のⅩ期を基準とする。Ｌ類－ａ・ｃ・Ⅰ類・Ｒ類が存在する。

１－４　東関東地方の研究

中期後葉の成立を探る一方のキーである，いわゆる中峠式土器群について避けて通ることはできない。ここでは，その主導者であり，かつ自ら再検討を目指している下総考古学研究会の動きをみておくことにし（大村裕・建石徹他1998），中峠式およびそれに類似する土器群を整理しておく。
「＜中峠式＞（中峠０地点型深鉢）」　４次１住炉体・４次２住下フラスコ状ピット　口頸部文様帯が著しく狭く，その下端の隆線は一周しない。口縁下半には文様が存在せず，体部は横位展開の文様。千葉県北部から茨城県南部が分布の中心で，東京から埼玉東部に広がる。
「中峠５次２住型深鉢」　全面に縄紋施文する土器。阿玉台式に含まれるべき土器。鬼怒川水系沿いに栃木県東南部まで分布する。
「中峠６次１住型深鉢」　口辺の屈曲が鋭くなく，文様帯が下部まで及ぶ。下端は隆線により直線的に画される。加曽利Ｅ１式に含まれるべき土器。千葉県北部から茨城県南部にほぼ限定される。
「台耕地34号住型深鉢（台耕地型深鉢）」　台耕地34住１の土器。キャリパー形で，外反する口縁部に無文帯，口頸部に横Ｓ字状文が施される。伴出状況より勝坂式最終末に位置づけられる。東京都，埼玉県東部が分布の主体である。
「北50号住型深鉢（北型深鉢）」　北50住炉体土器。口縁部は無文で詰め襟状に立ち上がると思われる。屈曲部上半に，隆線で立体的な楕円区画を連結させ，頸部には３本の沈線が回る。大木８ａ式の影響が認められ，勝坂・阿玉台終末～加曽利Ｅ式初頭に位置づけられる。千葉県北部，茨城県南部，鬼怒川水系沿いに栃木県東南部まで分布する。
「三原田型深鉢」　三原田式（赤山1990）として設定された土器群のうち，中空の立体的把手を口辺の膨大する部分に施し，「河童」の顔のような文様を特徴とするもの，および立体装飾のかわりに「の」の字状突起を配し，波状の隆線で連結する土器。今のところ，群馬県東部を中心とする。

スワタイプ・七郎内Ⅱ群土器

北東関東から福島県にかけての地域における，特徴的な阿玉台系土器が指摘されている。鈴木，塚本の研究から簡単にみておきたい。

鈴木裕芳は茨城県日立市諏訪遺跡の報告書のなかで，胴部を懸垂隆帯によって区画する第６群土器を「スワタイプ」と仮称し，大木８ａ式以前から大木８ａ式最古段階に位置づけた。

塚本師也によれば，これらは地文の縄文と有節沈線を特徴とする土器群として整理され（塚本1990では「該種土器」とされるが，近年の塚本の表記（塚本1999）に従い「七郎内Ⅱ群」とする），Ａ～Ｆタイプ（Ｅは小形，Ｆはその他であり，実質的に４タイプ）に区分した上で，阿玉台Ⅰａ式からⅣ式にかけて存在していることが明らかにされた。阿玉台式や大木式と比較して，共通性もあ

るが相違点もあり，区別できる。阿玉台式や大木式とセットをなしつつ福島県南部及び栃木・茨城両県の北部に分布するとした。

1－5　佐久地方の土器群の研究

東信地域の土器様相を扱った研究としては，野村一寿，小林真寿，寺内隆夫らの研究がある。長野県北佐久郡川原田遺跡の中期中葉を分析した寺内隆夫（寺内 1997）の時期設定を見ておきたい。寺内は，「焼町式」「川原田式」という呼称は用いず，「曲線文」を装飾の根幹に据える土器群を「焼町土器」とし，文様帯，装飾単位，隆線装飾，貼付文，突起，沈線装飾，地文の各文様要素から型式設定と細分を行っている。

勝坂式については，下総考古学研究会（下総考古学研究会 1985）の5期区分を用いている。

Ⅰ期　五領ケ台Ⅱ式

Ⅱ期　勝坂Ⅱ式（新道式）・阿玉台Ⅱ式，後沖式，焼町土器古段階

Ⅲ期　勝坂Ⅲ式古段階（藤内式），阿玉台Ⅲ式，焼町土器古段階

Ⅳ期　焼町土器が主体となり，勝坂Ⅳ式（藤内Ⅱ～井戸尻Ⅰ式）の古い段階の土器を伴出。

Ⅴ期「焼町土器」の最も発達する時期で，勝坂Ⅳ式の新しい部分を伴出。

Ⅵ期「焼町土器」が衰退する時期で，勝坂Ⅴ式（井戸尻Ⅲ式）を伴出。

Ⅶ期　加曽利Ｅ１式，曽利Ⅰ式が均衡して見られ，川原田遺跡では「焼町土器」は皆無。

Ⅷ期　加曽利Ｅ２式の時期で，唐草文土器が加わる。

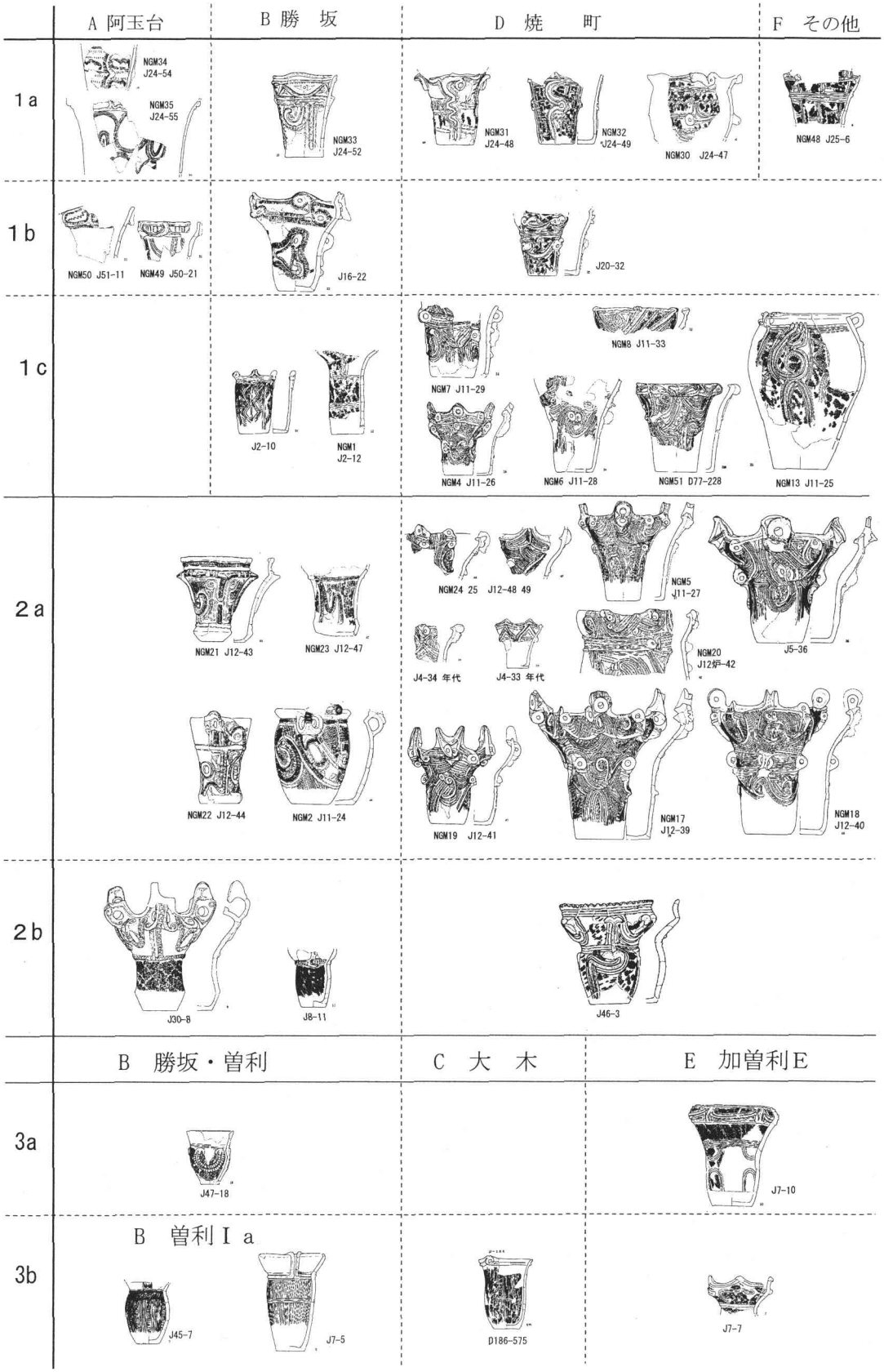
なお，Ⅶ・Ⅷ期については，水沢教子による（水沢 1995）。

このうち，Ⅱ～Ⅵ期が焼町土器の時期である。Ⅱ～Ⅲ期の焼町古段階「縄文を地文に，結節部に突起を持つ懸垂文を主装飾とし，沈線が沿う土器群」「東信地域において区画文を主体とする土器群（後沖式土器）から区画を極力避け，蛇行する隆線装飾に独自性を求めた土器の成立した段階」に「新巻土器」をあてている。

上記の焼町土器と下総考古勝坂式土器との対応関係は，川原田報告寺内論文第3図によれば，時期区分は微妙にずれており，川原田第Ⅱ期はおおよそ下総考古勝坂Ⅱ式（新道式）に平行するものの，川原田Ⅲ期は下総考古勝坂Ⅲ式の古い部分，川原田Ⅳ期は下総考古勝坂Ⅲ式後半から勝坂Ⅳ式の古い部分までにまたがり，川原田Ⅴ期は下総考古勝坂Ⅳ式の新しい部分，川原田Ⅴ期は下総考古勝坂Ⅴ式（井戸尻Ⅲ式）にほぼ対応する平行関係となっている。また，今回の報告においては，焼町土器の時期設定として改めて提示しているが，勝坂式土器群との平行関係については，さらに慎重に再編成し，千曲川流域として1期を後沖式，下総考古勝坂Ⅰ・Ⅱ式，阿玉台Ⅰ式が伴い，Ⅱ期は下総考古勝坂Ⅱ式からⅢ式の古い部分，Ⅲ期が藤内式とほぼ並行し，Ⅳ期が下総考古勝坂Ⅳ式（井戸尻式の前半部分）を伴う，Ⅴ期を在地製作の井戸尻Ⅲ式にほぼ対応する組成としている（本書第1部　型式学的検討　寺内論文（P 59～86）参照）。

川原田遺跡では，前半段階では，A阿玉台式，B焼町土器古段階，C後沖式，D勝坂式，Eその他，に系統区分している。

なお，同じ発掘調査報告書の別項で，山口逸弘（山口 1997）は，寺内のⅡ・Ⅲ期に当たるJ20・24・50・51号住及びＪ９号住出土の（寺内のいう）「焼町土器古段階」相当の土器例を「新巻類



第2図　川原田遺跡の土器

型」とし，寺内のⅣ・Ⅴ期に当たるＪ４・５・11・12号住及びＪ２号住出土例を「焼町類型」としている。「新巻類型」は阿玉台式甕状深鉢の波頂部を省略した形態とみて，阿玉台式の関与をみる。また，山口は，川原田遺跡と群馬県域について，新巻・焼町類型の異系統共存のあり方から，「同系統の土器群内に継続性と変容性の両極を備えた文様構成」や一遺構内に異系統土器が共存するあり方に共通性を見いだす一方，川原田遺跡における新巻・焼町両類型の主体的出土から，群馬県域との差異を指摘している。

１－６　新潟県の馬高式

寺崎裕助は，火炎土器様式ともいわれる馬高式土器を，大きくは新古の２段階，さらに各３細別して６段階に細分した（寺崎 1999）。

ⅠＡ段階　「火炎類型群」では，寸づまりの器形が多いが，形態的に火焔型土器が成立しており，半載竹管も見られるが沈線や隆線が主体である。「塔ケ崎類型群」は大木７ｂ式平行期の残映がうかがわれる。

ⅠＢ段階　「火炎類型群」では，深鉢が中心となり，鶏頭冠把手は４個対峙して付される。隆起帯と隆線で付されるものが多くなる。「塔ケ崎類型群」は，クランク文が引き続き目立ち，先端部が渦を巻くようになる。

ⅠＣ段階　「火炎類型群」は，ピークを迎え，渦巻き中心に空白部を残さず施文される。王冠形土器もここに含まれる。「塔ケ崎類型群」は，３本１組の平行沈線で施文されるものが多くなる。加曽利Ｅ１式に比定される可能性がある。

ⅡＡ段階　「火炎類型群」は，形態的に細く引き締められ，火焔土器に近似するようになるが鶏頭冠把手を中心とした４単位ではない。「塔ケ崎類型群」は，キャリパー形深鉢が主体となり，口縁部・頸部・胴部の文様帯に３分できる。

ⅡＢ段階　「火炎類型群」は，火焔型土器は鶏頭冠把手が高く伸び４単位をなし，頸部も細く，典型的な火焔土器のプロポーションとなる。王冠型土器においても波頂部付近に抉りが入るタイプが殆どとなる。「塔ケ崎類型群」は，前段階を踏襲するが，縦位細沈線で充填するタイプや口縁部に１・２単位の大型把手を持つものが目立つ。

ⅡＣ段階　「火炎類型群」の火焔型土器は，鶏頭冠把手がさらに上に伸び，鋸歯状小突起も大型化し，波状口縁が大きくなる王冠型土器ともども不安定なプロポーションとなる。「塔ケ崎類型群」は，縦位細沈線で充填するタイプが主体を占める。唐草文系土器との関係も指摘される「栃倉類型群」が初現する。加曽利Ｅ２式末に比定される可能性がある。

寺崎の整理した序列にコメントし得る材料を筆者は持たないが，本稿に関連する時期比定について，寺崎が示した図から伴出資料を見る限りでは，ⅠＡ段階には焼町土器が伴出し，塔ケ崎類型には大木7b式新，阿玉台Ⅳ式の影響が認め得るとともに，大木８ａ式期と考え得る土器も含まれる。ⅠＢ段階には北陸地方上山田式（新）が伴出し，塔ケ崎類型には大木８ａ式平行と考え得る土器が多い。ⅡＡ段階の塔ケ崎類型には，加曽利Ｅ１式中～後葉に類するもの（新地平 10 bc 期）が見られ，Ｅ２式古（新地平 11b 期）に含め得る土器もある。ⅡＢ・Ｃ段階の塔ケ崎類型には，大木８ａ式の新か８ｂ式，加曽利Ｅ２式（新地平 11 a 期）が見られる。以上より，寺崎のⅠＡ段階は本

稿２－１での１期，ＩＢ段階は，勝坂３式平行の本稿での２期，ＩＣ・ⅡＡ段階は加曽利Ｅ１式期で本稿の３期，ⅡＢ・Ｃ（大木９式期に比定される可能性のある原遺跡11号住例を除く）段階は加曽利Ｅ２式期で本稿の４期に相当させておきたい。

❷……時期と系統の設定

２－１　時期設定

以上の各研究者の時期設定の相互比定については，第１表に示す。

本稿では，ややラフながら，各研究者の時期設定の概ね共通した画期を選び，当該時期の大まかな変遷を辿り得る時期区分を採用することとしたい。

１期　藤内Ⅰ・Ⅱ式段階とする。阿玉台Ⅱ式新段階・Ⅲ式，大木７ｂ・８ａ式が平行する。新地平編年の７・８期があたる。ほぼ，山口1999の沼南第１段階，塚本1997の浄法寺阿玉台Ⅲ式期の大部分に相当しよう。勝坂式土器を介在させて対比させれば，寺内の川原田中期Ⅲ・Ⅳ期が１期になろう。なお，川原田遺跡においては，新道式並行を含めて寺内が扱っているため，変則的ながら川原田遺跡の土器についてはより古い新道式期（新地平６期）から含め１ａ期とし，勝坂式土器との対比から，藤内Ⅰ式並行（新地平７期）を１ｂ期，藤内Ⅱ式並行（新地平８期）を１ｃ期とした。

２期　井戸尻式段階とする。阿玉台Ⅳ式，大木８ａ式が平行する。新地平９ab期であり，山口の第２段階，塚本の阿玉台Ⅳ式期の大部分が相当しよう。勝坂式土器を介在させて対比させれば，寺内の川原田中期Ⅴ・Ⅵ期がおおむね２期になると思われるが，１・２期の境と寺内Ⅳ・Ⅴ期の境，２・３期の境と寺内Ⅴ・Ⅵ期の境は若干のズレが存在する可能性がある。川原田遺跡の土器については，勝坂式土器との対比から，井戸尻Ⅰ式並行（新地平９ａ期）を２ａ期，井戸尻Ⅲ式並行（新地平９ｂ期）を２ｂ期とした。

３期　加曽利Ｅ１式成立段階である。大木８ａ・ｂ式，いわゆる中峠式も含まれる。新地平10ab期が概ね相当するが，中峠０地点型深鉢をこの期に含めるため，新地平編年の９ｃ期を３期に含め，３ａ期とし，新地平10ab期の撚糸地紋・横Ｓ字状モチーフの武蔵野台地型深鉢の時期を３ｂ期とする。塚本の加曽利ＥⅠ（古）・（中）式が相当すると思われる。

本稿の検討対象外であるが，続く加曽利Ｅ２式期は，必要に応じ４期とする。

なお，特に加曽利Ｅ式成立期について，実際には表に記したような形で平行関係が取れるものではない。新地平９ｃ・10ａ期は南関東地方の編年であり，北関東地方・東信地方の土器と，実体としての土器に差異が大きい。

北関東地方と南関東地方では，中峠０地点型深鉢などの扱い，武蔵野台地型深鉢的な土器などの実態や，遺構一括の出土状況を同時期のフンドと捉えるかといった取り扱い方から差異が生じてくる。ただし，山口は，沼南遺跡での事例の少なさ等からまとめている観があり，本来的には区分される可能性を示唆している。塚本は，中峠式土器において阿玉台Ⅳ式期に伴う段階と加曽利Ｅ式成立期に伴う段階とを区分しつつ，中峠式自体に両時期の差異は認めにくいとしており，単純に時期区分する難しさを示している。北関東地方と南西関東地方とにおいて，加曽利Ｅ式土器の成立期における時期区分が１細別時期食い違うようにみえるのは，北関東地方に撚糸紋地紋・横Ｓ字モチー

フの武蔵野台地型の加曽利Ｅ１式の初現期の土器が少ないことと，いわゆる中峠式の扱いによるものと思われる。これらが実体としての土器群または文様要素の変遷における時間的なズレを反映しているのか，研究者間の認識の異なりを主に反映しているのかは，検討を要するところであろう。

次に，川原田遺跡の中期中葉についても，胎土分析試料の提示を兼ねて第２図に示しておきたい。基本的には，川原田遺跡の報告書の記載および考察での寺内・山口の記述に従うが，一部の勝坂系・阿玉台系土器については，時期的な位置づけを小林の考えで動かした部分もあるので了承されたい。また，後述する小林の土器系統をアルファベットで付した。なお，NGN が胎土分析試料№であり，J**-* は川原田遺跡報告書での遺構名（J は住居，D は土坑）と図№である。以下に時期対比を行う。

１ａ期　上記の１期のうち，勝坂１式新道式，阿玉台Ⅰｂ～Ⅱ古式が伴う時期で，新地平編年の６期である。川原田遺跡７期，寺内隆夫の川原田Ⅱ期が概ね対応する。勝坂系では，折衷土器的な J24-52 や，群馬県地方の特徴的な大型把手と思われる J20-39 などがみられ，阿玉台系では，東関東的な J24-54 や群馬県または東信地方在地の変容した阿玉台ではないかと思われる J24-55 などがある。また，J25-６は不明瞭ではあるが，新潟県域の大木７ｂ系の土器かとも思われる。焼町系は，新巻タイプである。

１ｂ期　藤内Ⅰ式，阿玉台Ⅱ式新を伴う。新地平７期に相当する。川原田報告の８期，寺内の川原田Ⅲ期にほぼ対応する。勝坂系では大型把手と思われる J25-8 などがみられ，J28-4 は，群馬県の鼻毛石タイプと思われる。阿玉台系の J50-20 は阿玉台Ⅱ式新，J20-41 ・ J51-11 は，阿玉台Ⅲ式であろう。焼町系では，概ね前時期の様相が続いている。

１ｃ期　藤内Ⅱ式，阿玉台Ⅲ式を伴う。新地平８期に対応しよう。川原田遺跡９期，寺内川原田Ⅳ期にほぼ相当しよう。阿玉台系土器は少なくなる。勝坂系では J2-21 など鼻毛石タイプが目立ってくる。焼町系は曲線隆線がはっきりしてくる。

２ａ期　２期のうち井戸尻Ⅰ式または勝坂３ａ式が伴う。新地平９ａ期である。川原田遺跡 10 期，寺内川原田Ⅳ～Ⅴ期が含まれる。J12 住居は多量の焼町系が出土しているが，埋炉の J12-42 など平縁の土器が古く，覆土中の波状縁の発達するタイプは新しくおかれている。勝坂系では，中部高地プロパーと思われる J12-44 などが目立つが，J11-38 は群馬県地方の土器ではないかと思われる。

２ｂ期　井戸尻Ⅲ式。勝坂３Ｂ式が伴う新地平９ｂ期に相当する。川原田遺跡 11 期，寺内川原田Ⅴ期が含まれる。勝坂系では，中部系の J30-８などが目立つが，樽型器形の J11-24 は群馬県の土器である可能性もある。

３ａ期　勝坂終末期・加曽利Ｅ成立期にあたり新地平９ｃ期で，川原田遺跡 12 期である。勝坂系土器は中部高地系と思われる。加曽利Ｅ系では，胴部に矩形区画的なモチーフを持ち，北関東的と思われるＪ７-10 がみられる。

３ｂ期　曽利Ⅰａ式，加曽利Ｅ１式初頭であり，新地平 10 ａ期以降の時期である。D186-575 は，大木８ｂ式古の可能性があろう。加曽利Ｅ系には，D91-259 など武蔵野タイプの横Ｓ字状モチーフがみられる。

2－2　系統区分

以上の研究史にみられる各研究者の系統区分については第2表に示す。以下は，筆者による系統区分である。

A　阿玉台式土器群。A 1を下総台地・利根川下流域・霞ヶ浦周辺を主とした東関東地方の阿玉台式土器群，A 2を東京湾岸・大宮大地にみられる勝坂式土器の影響を受けた折衷土器を含む阿玉台式土器群，A 3を群馬県地域の在地化した阿玉台式または阿玉台系統の土器群，とする。

B　勝坂式または勝坂系統の土器群。B 1を武蔵野台地・多摩丘陵・相模原台地の南西関東地方の勝坂式土器群，B 2を寺内の後沖式を含む，斜行沈線文・截痕文などの特徴を含む，佐久～北信地方の勝坂式土器群，B 3を鼻毛石中山タイプなど細胴大把手の土器や甕状深鉢などの群馬県の在地化した勝坂式または勝坂系統の土器群，B 4は大宮大地や東関東地方にみられる，阿玉台式の影響を受けた，折衷土器を含む勝坂系統の土器群，とする。

C　大木系統の土器群。C 1を南東北地方の大木式土器と考えられるもの，C 2を七郎内Ⅱ群土器，C 3を那須地方など北関東地方の大木系土器群，C 4を群馬県域の在地化した大木系土器群とする。

D　焼町土器。

E　加曽利E式土器群およびそれに関連するもの。いわゆる中峠式の仲間を含む。E 1を三原田タイプの土器群，E 2を浄法寺タイプを含む北関東地方の土器群，E 3を中峠0地点型深鉢，E 4を武蔵野台地型の加曽利E 1式土器とする。

F　馬高式を含む越後地方の土器群。北陸地方の土器を含む。

G　粗製土器と考えられる非装飾的な土器群。

おわりに

以上，研究史の概観と，ガイドラインとしての時期設定，系統設定を整理した。ただし，時期・系統設定とも，第1部　型式学的検討の各論においては，各地の地域性を加味して，別途に設定することとなろう。研究者間の認識の相違については，第1・2表を参照されたい。なお，各研究者の編年対比に誤りがあれば，小林の責任である。参考文献にあげるような，それぞれの出典を参照されたい。

第1表　北関東・東信地方の中期中葉の時期設定（各研究者の対比）

山口 沼南1999	塚本 浄法寺1997	新地平 黒尾・小林・ 中山1995	小林 本稿	寺内 下総考古 1985	寺内・水沢 川原田1997 川原田Ⅰ期	寺内・水沢 屋代2000	寺内 本稿	南関東	東関東	東北	佐久	中部
		6a		勝坂Ⅱ式	川原田Ⅱ期	中葉2期		勝坂1b	阿玉台Ⅰb			新道
		6b					Ⅱ期					
第1段階		7a	1期	勝坂Ⅲ式	川原田Ⅲ期			勝坂2a	阿玉台Ⅱ	大木7b	プレ焼町	藤内Ⅰ
		7b					Ⅲ期		阿玉台Ⅲ	大木8a		
		8a			川原田Ⅳ期	中葉3期		勝坂2b				藤内Ⅱ
	阿玉台Ⅲ式期	8b										
		9a	2期	勝坂Ⅳ式	川原田Ⅴ期	中葉4期	Ⅳ期	勝坂3a			焼町	井戸尻Ⅰ
第2段階	阿玉台Ⅳ式期	9b		勝坂Ⅴ式	川原田Ⅵ期		Ⅴ期	勝坂3b	阿玉台Ⅳ			井戸尻Ⅲ
		9c	3期	中峠					(中峠)			梨久保
		10a			川原田Ⅶ期	梨久保B		加曽利E1			加曽利E1	曽利Ⅰ
	加曽利EⅠ(古)	10b										曽利Ⅰ
	加曽利EⅠ(中)	10c								大木8b		曽利Ⅱ
	加曽利EⅠ(新)	11a	4期		川原田Ⅷ期	後葉2a		加曽利E2			加曽利E2	唐草文
		11b										
		11c1										
		11c2										
群馬県	那須	南関東	群馬県									

第2表　北関東・東信地方の土器系統区分の対比

山口1999	塚本1997	小林(本稿)	寺内1997　(東信)
阿玉台式	A	A阿玉台系統	阿玉台式
		A1東関東	在地で変容した阿玉台式系統
		A2東京湾岸の勝玉系	浅い平行沈線を持つ(群馬県主体)
(新巻類型)		A3群馬在地・折衷	
		B勝坂系統	勝坂式
		B1南西関東	(在地or群馬系)
		B2北信・東信(斜行沈線・裁痕紋ほか)	
勝坂系(樽形)		B3群馬在地(細胴大把手・鼻毛石・樽形深鉢)	
		B4大宮大地・東関東系	
		C大木系統	
	N	C1南東北	
七郎内C類型	B七郎内Ⅱ群土器	C2七郎内Ⅱ群土器	
	C・D・E	C3北関東系	
		C4群馬在地と思われるもの	
焼町類型		D焼町土器	在地系後沖式・焼町土器
		E加曽利E系統	
三原田型深鉢		E1三原田(かっぱ土器)	
北関東系	F・G・H・R(浄法寺)	E2北関東系(浄法寺タイプ他)	
中峠0地点型		E3中峠0地点型深鉢	
加曽利EⅠ古	I・J・K・L・M	E4南関東	
北陸系	Q	F北陸系(火炎土器)	
		越後と越中・能登・北加賀	
	O・P	G粗製土器	

註

（1）―― これまで拙稿において，中期前半の時期設定を行ってきた。その時期設定・段階設定について，新地平編年との対比をみておく。

CM段階　M群・F群1類の段階。今村啓爾氏の五領ケ台Ⅰ式，山口明氏のA・B型式（山口1980），小林1994aの五領ケ台貝塚出土資料分類のB群・A群1類a種に当る。新地平1期。

CS段階Ⅰa期　五領ケ台Ⅱ式初頭，今村氏の五領ケ台Ⅱa式にほぼ対応し，山口氏のC・DⅠ型式を含む。小林の五領ケ台分類C群1類イ種・A群1類b種に当たり多摩地域での成立期Ⅰa期（小林1993）である。第一文様帯に幅狭い縄文帯を有する。新地平2期。

CS段階Ⅰb期　五領ケ台Ⅱ式前葉，今村氏の五領ケ台Ⅱb式の一部，山口氏のF型式の一部にほぼ対応し，小林の五領ケ台分類C群1類ロ種，A群2類a1種に，多摩地域のⅠb期に当たる。半裁竹管による平行沈線が多用される。踊場系土器は次第に簡略化する傾向がある。新地平3a期。

CS段階Ⅰc期（成立期Ⅰ期）　五領ケ台Ⅱ式中葉，今村氏の五領ケ台Ⅱb式にほぼ対応し，山口氏のF型式の多くが当たる。小林の勝坂式成立期編年（小林1984）Ⅰ期，五領ケ台貝塚C群2類，A群2類a2種に当たり，多摩地域での1c期である。新地平3b期。

CS段階Ⅱ期（成立期Ⅱ期）　五領ケ台Ⅱ式後葉。今村氏五領ケ台Ⅱc式，山口氏G型式に対応する。小林の勝坂成立期Ⅱ期，五領ケ台分類C群3類，A群2類b種が相当し，多摩地域でのⅡ期である。新地平4期。

CZ段階Ⅰ期（成立期Ⅲ期）　小林1984の勝坂式・阿玉台式成立期Ⅲ期である。今村氏の神谷原式なども含まれる。連続刺突文技法成立をもって本期とする。旧稿による勝坂成立期のⅢa·b期に対応し2細別する。数野氏の角押文Ⅰ期に比される。新地平5a期。

CZ段階Ⅱ期（成立期Ⅳ期）　狢沢式，阿玉台Ⅰa式・Ⅰb式新に当たる。勝坂成立期のⅣa·b期に対応して，2細別する。CZⅡa期が数野氏のⅡ期，CZⅡb期が同Ⅲ期であろう。新地平5bc期。

CZ段階ⅢA期（成立期Ⅴ期）　新道式古期，阿玉台Ⅰb式新に当たる。勝坂式成立期Ⅴ期である。新地平6a期。本稿での1a期はこの時期からとしたい。

CZ段階Ⅲb期（成立期Ⅵ期）　新道式新期，阿玉台Ⅱ式古に当たる。勝坂式成立期Ⅵ期である。新地平6b期。

CC段階（成立期Ⅶ期）　藤内式古期，阿玉台Ⅱ式新期。成立期Ⅶ期とする。新地平7期。

引用文献

赤山容造　1990『三原田遺跡』第二巻　群馬県企業局
相原淳一　1999「縄文時代文化研究の100年　仙台湾周辺　早期～中期」『縄文時代』第10号　縄文時代文化研究会
赤山容造　1990『三原田遺跡（中期前半－後期初頭篇）－赤城山西麓における縄文中期集落跡－』群馬県企業局
今村啓爾　1985「五領ケ台式土器の編年－その細分および東北地方との関係を中心に－」『東京大学考古学研究室紀要』4　東京大学考古学研究室
大村裕・大内千年・建石徹・高山茂明・三門準　1998「中峠式土器の型式論的検討」『下総考古学』15　下総考古学研究会
大塚昌彦　1987「行幸田山遺跡縄文時代中期土器編年的試案」『行幸田山遺跡　＜本文編Ⅰ＞』渋川市教育委員会
金子直行　2001「加曽利EⅠ式成立期における土器群の再検討」『入間郡毛呂山町まま上遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
黒尾和久　1995「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（Ⅰ）－時間軸の設定とその考え方について－」『論集　宇津木台』第1集　宇津木台地区考古学研究会
小林謙一　1984「中部·関東地方における勝坂·阿玉台式土器成立期の様相」『神奈川考古』第19号　神奈川考古学同人会
小林謙一　1994a「五領ケ台貝塚出土土器について」『民族考古』第二号　慶應義塾大学民族学考古学研究室
小林謙一　1994b「甲府盆地周辺における勝坂式成立期の土器様相」『山梨県考古学論集』Ⅲ　山梨県考古学協会
小林謙一　2001「学界動向　考古　二」『史学雑誌』2001年5月号　史学会
小林真寿　1996「浅間山麓の縄文中期中葉土器論　焼町土器の研究」『長野県考古学会誌』80号　長野県考古学会
佐藤達夫　1973「朝霞市城山遺跡」『第6回埼玉県遺跡発掘調査報告会発表要旨』
下総考古学研究会　1985「勝坂式土器の研究」『下総考古学』8　下総考古学研究会
下総考古学研究会　2000「千葉県松戸市中峠第4次調査（中峠式土器の大量出土）の成果」『下総考古学』16　下総考古学研究会
谷井彪・宮崎朝雄・大塚孝司・鈴木秀雄・青木美代子・金子直行・細田勝　1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
谷井　彪　1987「加曽利E式土器における口縁部文様と形態の系譜」『埼玉の考古学』柳田敏司先生還暦記念論文集刊行委員会
塚本師也　1997「第Ⅵ章第2節中期縄文土器について」『浄法寺遺跡　県営圃場整備事業小川北西部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査』栃木県埋蔵文化財調査報告第196集　栃木県教育委員会・（財）栃木県文化振興事業団

塚本師也　1990「北関東・南東北における中期前半の土器様相」『古代』第89号　早稲田大学考古学会
塚本師也　2000「茨城県における縄文時代中期中葉の土器について－つくば市中台遺跡と谷和原村前田村遺跡の調査成果から－」『常総台地』15　常総台地研究会
堤　　隆　1997「浅間山南麓における縄文社会復元に向けて－塩野西遺跡群の調査成果からの素描－」『川原田遺跡縄文編』御代田町教育委員会
寺内隆夫　1984「角押文を多用する土器群について」『下総考古学』7　下総考古学研究会
寺内隆夫　1987a「五領ケ台式土器から勝坂式土器へ－形式変遷における一視点－」『長野県埋蔵文化財センター紀要』1　長野県埋蔵文化財センター
寺内隆夫　1987b「勝坂式土器成立期に見られる差異の顕在化－隣接型式との関係 阿玉台式その1」『下総考古学』9　下総考古学研究会
寺内隆夫　1992「浅間山東側から視線，西側からの視線－焼町土器の成立をどうとらえるか－」『長野県考古学会誌』67号　長野県考古学会
寺内隆夫　1997「川原田遺跡縄文時代中期中葉の土器群について」『川原田遺跡縄文編』　御代田町教育委員会
寺内隆夫　2000「第4章時期区分　第1節層位区分と出土土器による時期区分　1出土土器による時期区分」「第10章成果と課題　第1節縄文中期の土器　1中期前葉の土器」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書54　上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書28　更埴市内その7　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　総論編』
寺崎裕助　1999「縄文時代文化研究の100年　中部地方　中期（馬高式）」『縄文時代』第10号　縄文時代文化研究会
西村正衛　1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』　早稲田大学出版局
野村一寿　1984「塩尻市焼町遺跡第1号住居址出土土器とその類例の位置づけ」『中部高地の考古学』Ⅲ　長野県考古学会
長谷川福次　2001「道訓前遺跡の焼町土器」『道訓前遺跡』北橘村教育委員会
三上徹也　1996『花上寺遺跡』岡谷市教育委員会
水沢教子　1996「大木8Ｂ式土器の変容（上）－東北，越後そして信濃へ－」『長野県の考古学』　長野県埋蔵文化財センター
水沢教子　1997「川原田遺跡出土の縄文中期後半の土器について－川原田中期第Ⅶ・Ⅷ期の様相－」『川原田遺跡縄文編』　御代田町教育委員会
水沢教子　2000「第5章縄文中期後葉（ⅩⅡ－2層検出）の遺構と遺物　土器」『長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書51　上信越自動車道　埋蔵文化財発掘調査報告書24　更埴市内その3　更埴条里遺跡・屋代遺跡群　縄文時代編』
山口　明　1980「縄文時代中期初頭土器群における型式の実態」『静岡県考古学会シンポジウム』4　静岡県考古学会
山口　明　1984「中部地方における前期末葉土器と鍋屋町式土器」『長野県考古学会誌』48号　長野県考古学会
山口逸弘　1990「群馬県における阿玉台式の諸様相－新巻遺跡出土土器の分析を中心にして－」『研究紀要』7　群馬県埋蔵文化財事業団
山口逸弘　1991「「新巻類型」と「焼町類型」の文様構成」『土曜考古』16　土曜考古学研究会
山口逸弘　1992「大和田遺跡出土の中期縄文土器について」『群馬考古学手帳』3号　群馬土器観会
山口逸弘　1997「川原田遺跡「新巻類型」と「焼町類型」」『川原田遺跡縄文編』　御代田町教育委員会
山口逸弘　1999「土壙出土土器の選択性－中期土壙の2個体の共伴例から－」『縄文土器論集』縄文セミナーの会
山口逸弘　2000「「勝坂系」土器という末裔たち－勝坂式以降における文様構成の伝統と収斂化－」『群馬県考古学手帖』10
山口逸弘　2001「道訓前遺跡Ⅰ出土の「三原田型深鉢」について－縄文時代中期後葉の伝統的立場－」『道訓前遺跡』北橘村教育委員会
山内清男　1937「縄紋土器型式の細別と大別」『先史考古学』1-1　阿佐ヶ谷先史学研究会

小林謙一（総合研究大学院大学文化科学研究科日本歴史研究専攻）